

私立学校の「特色」とは何か 1

- 校歌と「建学の精神」 -

小池俊夫（日本私学教育研究所主任研究員）

序 校歌のある風景

現代の高校生にとって、校歌がよく似合う場所は、入・卒業式の会場などではなく、恐らくは甲子園球場のスタンドではないだろうか。昨2006年の夏も、再試合に燃えた決勝戦で、万感の校歌を聴いた学校を筆頭に、様々なドラマのシーンを校歌が彩った。テレビ中継によって、それは全国に響く。校歌は「母校」の存在を強く意識させ、帰属感・一体感を高める。地元では、市や町という共同体の意識形成にも繋がっている。

私立学校に限らないが、今日、学校は鮮明な特色を発揮することが求められている。特色は外見にははっきりと窺えることが必要である。そうした指標を取り上げて考察することをテーマとし、最初に「校歌」を選んだのが本研究である。

結 調査から見えた「校歌と私学」

(1) 『『校歌』の歌詞ご提供とアンケートのお願い』の結果概要

2006年9月5日付けで、全国の私立高校1,322校に「調査票」(A4判用紙1枚)を郵送し、下記の項目への回答と校歌の歌詞の提供とをお願いした(悉皆調査)。

現行校歌の作詞者、作曲者と校歌制定年月日(その日の意味も)。

過去に別の校歌があれば、その作詞者、作曲者と改訂した理由。

校歌に対する教員、生徒、保護者、卒業生の反応(記入者の分かる範囲で)。

今後、校歌を改訂する予定の有無。

学校としての校歌についての考え方など。

9月末を締め切りとしたが、その後の着信も加え、最終的に667校からの回答・提供を頂けた。回収率50.5%。

今回は、その第一報として、私立高校の校歌の特徴を整理し、傾向性を明らかにしたものである。その際、東京都内の学校は分析対象から外した。それは、日本の私学は大都市偏在性が強く、特に首都圏で顕著である。今回の回答校の20%は東京の私学で、全体傾向を見る上で過

重に働くからである。東京は改めて分析する。

以上の結果、分析対象は536校(40.5%)となり、地方別の集計結果は下表の通りで、校歌のある回答校は525校である。

地 方	回 答 数	校歌のない学校	校歌改訂あり	校歌改訂なし
北海道	37	0	8	29
東 北	44	0	15	29
関 東	118	5	25	88
中 部	93	1	33	59
近 畿	117	2	24	91
中 国	48	1	12	35
四 国	18	1	7	10
九 州	61	1	18	42
計	536	11	142	383

(2) 普遍の重さと時代の風

校歌の歌詞を概観して気付くことは、「建学の精神」を詠みこみ、理想を追求するとともに高校生としての意識の高揚を図ろうとする共通性が認められることである。そこには、国家・社会への貢献という意識も、強く籠められている。

このような歌の原型として、旧制高校の寮歌が想起できる。代表的なのは「一高寮歌」(矢野勤治作詞・楠正一作曲、1902年制定)であろう。

嗚呼玉杯に花うけて	緑酒に月の影宿し
治安の夢に耽りたる	栄華の巷低く見て
向ヶ丘にそそり立つ	五寮の健児意気高し

新制高校の理念を明確にし、「高校とは何か」を問うことよりも、旧制の高校、あるいは中学校や高等女学校の情景を継承し、学校の歴史と伝統を顕示することに校歌の存在理由があると考えられる。そして、「皇国」を「御国」や「国」に変えて残る公共心も、軍国思想ではなくある種のエリート意識だと言える。

一方で、このような校歌観から離れ、現代の高校生によるメッセージソングとしての校歌も登場している。80年代以降の校歌には、「タイトル」が付けられているものが見られるが、いくつかを例示する。

「朝風に」(秋田和洋女子、1984年)	「いのちは緑」(札幌新陽、1987年)
「水のように」(如水館、1994年)	「青春の丘」(文徳、1997年)
「出会いの時」(英真学園、2000年)	「気高く永遠に」(桜林、2005年)

(3) 「この地」の「わが母校」 - 地名と校名 -

歌詞のキーワード抽出の第一段階として行ったのが、歌詞中の地名と校名の有無である。
525校中、

地名を詠みこんだもの	9 1
校名(学園名)を詠みこんだもの	1 1 5
地名も校名も詠みこんだもの	2 0 1

となり、地名か校名かいずれかを詠っているのは407校(77.5%)という高さであった。山を望み、清い川の流れを眺めるわが母校という情景は、啄木や牧水の詩情に通じるものがある。

(4) 共学化と校歌

過去にあった校歌の改訂を行った142校のうち、共学化(及びそれに伴う校名変更)によるものが49校で最も多い。次いで、戦後の学制改革によるものが13校で、その他は校名変更や周年記念によるものなどである。

校歌改訂の三分の一は、男子校または女子校から共学校への変化が理由となっているが、全面改訂で全く新しい歌とするものだけではない。「健児」「乙女」を「若人」や「われら」に改めるだけで、出来るだけ原形を温存しようとする傾向も強い。中には、共学校になっても「乙女」のまま使われているものもある。内容としては明らかに男子向け、女子向けであっても、男女を示す直接的な表現がなければ改訂はしない例もある。ここにも、校歌の普遍性・伝統重視の性格が見られる。

共学化は「新しい学校」の誕生である。「建学の精神」の不易な思想は継承しつつも、新たな思いの表現が考えられるべきではないだろうか。

(5) 作詞・作曲者ベスト5から見る校歌

校歌は誰が作るのか。

創立者が、その建学への「思い・願い」を籠めて作詞したもの、卒業生を含む生徒が作詞・作曲したものなど多様である。ミッションスクールの中には、讃美歌の曲を使っているもの、スコットランド民謡やドイツ歌曲を用いたり、ハイドンの曲を使用している例もある。一方、多くの校歌に共通する専門的な作者もいる。作曲者に顕著である。

作 詞 者		作 曲 者	
勝 承 夫 (1902～1981)	6	山 田 耕 筈 (1886～1965)	1 5
北 原 白 秋 (1885～1942)	5	信 時 潔 (1887～1965)	1 3
土 岐 善 麿 (1885～1980)	5	團 伊 玖 磨 (1924～2001)	1 1
大 木 惇 夫 (1895～1977)	5	平 井 康 三 郎 (1910～2002)	9
土 井 晚 翠 (1871～1952)	4	中 田 喜 直 (1923～2000)	8
佐々木 信 綱 (1872～1963)	4	弘 田 龍 太 郎 (1892～1952)	5
谷 川 俊 太 郎 (1931～)	4	近 衛 秀 磨 (1898～1973)	5

(数字は校数)

今回の調査対象枚の10%あまりの曲を、上の7人が作曲しているのである。大正と昭和を代表する作曲家であり、すべて故人となっている。校歌の伝統性やイメージはこれらにも由来するのだろう。

(6) 校歌に求めるものと現実

アンケートの記入者は、校長などの管理者、校歌にかかわりの強い生徒指導、国語科や音楽科の教員、音楽担当の非常勤講師など多様であった。丁寧に校内調査を実施して下さった例もあったが、多くは「印象レベル」であるが、学校が校歌に寄せる「思い」は、想像以上に強い。しかし、生徒との間には架橋すべき溝が窺える。ここでも、「不易と流行」とどう向き合うかの問題が浮上する。

跋 校歌が輝く風景

21世紀に相応しい校歌が摸索される時なのかもしれない。だからといって、徒に改訂を求めるのではない。学校の主役である子どもたちが納得して、スポーツの場面以外でも謳歌できるものを求めるべきだろう。迎合せず、協働するために。

多くの回答を寄せて頂いた学校に、心から感謝申し上げます。筆者の一身上の理由もあり、速報で一旦終えるが、近い将来詳細の報告をと考えている。日本私学教育研究所の研究職として最後の報告を、これで感謝を籠めて閉じさせて頂く(2007年2月28日)。

(筆者は、現在昭和女子大学総合教育センター教授である。)